

銭鍾書と父親「たち」

杉 村 安幾子

Qian Zhongshu and His “Fathers”

SUGIMURA, Akiko

金沢大学外国語教育研究センター
『言語文化論叢』第15号
2011年3月刊

Foreign Language Institute
Kanazawa University
Studies of Language and Culture
Volume 15
March 2011

錢鍾書と父親「たち」

杉 村 安幾子

1. 序

錢鍾書（1910-1998）の長篇小説『困城』には次のような一段がある。父親にそろそろお前も結婚しろと言われた際の、主人公方鴻漸による感慨である。

鴻漸は秘かに思った。何だって可愛い女の子には必ず父親なんてものがあるんだらう？
彼女一人きりなら心の内にひっそり匿って優しくしてやれるのに、それ父親だ叔父さんだ
兄弟だのとゴチャゴチャくっ付いてくるものだから……

ここでは「女の子には必ず父親がいる」という表現になっているが、当然のことながら誰も父親はいる。方鴻漸自身、清朝の挙人であり地元の名士である方遯翁を父親とし、彼の息子自慢や過干渉を煙たく思っている。息子の父親に対するこうした感情は、古今東西を問わず普遍的なものであろう。

錢鍾書は1949年の中華人民共和国建国以前に何篇かの小説を発表している。1945年11月『新語』半月刊に二期に分けて短篇小説「靈感」を、翌年1月『文芸復興』月刊創刊号に「猫」を掲載し、2月から『文芸復興』で「困城」の連載を開始している。同年6月には上海開明書店から短篇小説集『人・獣・鬼』を刊行し、所収作品は上記の「靈感」「猫」の他、「上帝的夢」「紀念」の計四篇であった。これら『困城』を含む五篇の小説は、上記の引用が示すように何らかの形で「親」若しくは「親」的な存在がモチーフであったり、作品中でその存在感を明確に示している²。錢鍾書作品におけるこの「親」的な存在については、従来の錢鍾書研究にも全く言及はなく、看過されてきた主要モチーフ

と言って良い。

一方、作者錢鍾書自身の父親錢基博（1887-1957）は著名な学者であった。錢基博は江蘇省無錫にて三男として出生。長じてからは小中学校の他、上海聖約翰大学、清華大学、上海光華大学、無錫国学専門学院、浙江大学、国立師範学院、華中大学（後に華中師範学院に）等で教鞭を執る傍ら、執筆活動を精力的に行い、『現代中国文学史』や『韓愈志』、『経学通史』等の著書が多数ある。字は子泉、号を老泉、或いは潜廬といった。鴛鴦胡蝶派の小説家である王蘊章の妹と結婚し、錢鍾書を長子として計四人の子がいる。息子である錢鍾書の活躍に比べると、錢基博の名はしばらく忘れられていたと言えるが、近年の国学ブームにより中国本国では「国学大師」とも称され、『錢基博學術論著選』（華中師範大学出版社 1997年）や『錢基博年譜』（華中師範大学出版社 2007年）が刊行されるなどして、再認識再評価の動きが高まっている。

錢鍾書自身の生涯や作品に投げられたこの父錢基博の影は、姓が「王」とのみ伝えられるばかりで錢鍾書本人による言及の一つもない母親とは、比すべくもなく色濃く鮮明である。また、一人の作家を作家たらしめている要素は一概に言えるはずもなく、複雑かつ混沌といったカオスの様相を呈していることは間違いないが、錢鍾書という作家について考える時、父親の存在がそのカオスの相当部分を占めていると思われる。本稿は錢鍾書の伝記的事実と作品を通して、錢鍾書の生涯と作品における父親錢基博の影響を探ろうとするものである。博覧強記を誇り、「知的巨人」「文化崑崙」などと称された錢鍾書が、いかにして父親の影を越えんとしたか。それを検証することで、その試みが結果として作家・文人としての錢鍾書独自の道へとつながっていったことを明らかにしたい。

2. 父親としての学者錢基博と、錢鍾書作品に見られるエピソード

錢鍾書は5歳の時、従弟錢鍾韓とともに、父の長兄である伯父錢基成について勉強を始めている。錢鍾韓は錢基博の双子の弟錢基厚の長男であり、錢鍾書とは半年違いであった。当時、錢基博は呉江の麗則女子中学の教員をしており、

弟基厚は無錫の教育行政に携わっていた。二人とも元々は子供達に新式の教育を受けさせるつもりだったが、長兄の申し出を断れずに、息子達の教育を彼に任せることになる。こうした兄弟関係の背景としては、錢基成が錢基博・基厚よりも14歳上であったため、仲良く育った兄弟というよりは、父親に準ずるような立場であったのではないかということが推測できる。錢鍾書・鍾韓はこの伯父の下で四書五經の勉強をしたが、錢基成は錢鍾書にとっては優しい伯父であり、一方自分の兄の甘い教育方法に不満を抱いていた錢基博は、息子にひどく厳格であった。錢鍾書の妻楊絳は次のように記している。

錢基博は兄を責めることができずに、機を狙って鍾書を捕まえ、数学を教えるしかなかった。教えても彼が出来ないと、かっとなって打とうとし、兄に聞かれるのを恐れ、つねる他なかったが、鍾書が泣くのは許さなかった。⁴

教育熱心な錢基博は、息子達への古文の指導にも力を注いだ。従弟である錢鍾韓は錢鍾書と小学校から高校まで同級であり、「私達が東林小学校で学んでいた時、毎日午後に学校が終わると、伯父は私達に彼の仕事場（現在の無錫師範学校）に来るように言い、私達はそこで自習をしたり、伯父に古文を教わったりした」⁵と回想している。これだけにとどまらず、楊絳の回想には作文指導について「錢鍾書の父親が（長期休暇に）帰宅して最初にしたのは、鍾書と鍾韓にそれぞれ文章を一篇書くように命じたことである。鍾韓の文は大褒められたが、鍾書の文は文語でも口語でもなく、用語は俗っぽかったために、父親は怒りのあまり彼をひどく殴ったそうだ」⁶ともある。息子をつねったり殴ったりの体罰的指導は、現在の見地からは無論誉められたことではないが、こうした父親錢基博の厳しい指導を受けた錢鍾書は、次第に父親の代筆で書信や文章を書くようになる。以下、錢鍾書の中学時代に関する楊絳の紹介文を見てみよう。

鍾書は既に父親の厳しい管理教育を受けており、しょっちゅう父親の代筆をして書状を書いたり、口述筆記をしたり、父親の名で手紙や文章を代筆していた。（略）その頃、

商務印書館から錢穆が本を出版しており、鍾書の父親が序文を書いている。鍾書が私に言ったことによれば、それは彼が代筆したものであり、一字の手直しもしなかったそうだ。⁷

楊絳の文章にある錢穆の本とは、1931年出版の『国学概論』を指す。『錢基博學術論著選』の著作目録は「錢鍾書が書いた」との注釈付きでこの「『国学概論』序」を載せ、『錢基博年譜』の著作一覧は何の注釈も付さずに載せている。錢鍾書の「『国学概論』序」の執筆は1930年7月、丁度錢鍾書が清華大学の一年次を終えた頃であり、彼はまだ満20歳の誕生日を迎えていなかった。自分の名で息子の文章をそのまま発表するということは、錢基博にとって息子錢鍾書の書いた文が、文体も内容もともに外部に対して何ら恥ずかしくない、寧ろ誇るべきものであったのだらうと推測し得る。

さて、この父親による古文の指導は、『困城』にも見られるエピソードである。

彼（方鴻漸）は古文については、かつて父親に教えを受けたために、高校の合同試験で二番になったことがある。だからその手紙の文章は学者味たっぷりであり、なりけりけんやといった文語にも間違いはなかった。

この一段は、明らかに錢鍾書自身の体験に基づいている。更に『困城』には「彼（方鴻漸）は毎日父親の代筆で手紙を書いたり、薬の処方を書いたりし、暇ができると街に出てぶらついた」ともあり、前述の楊絳の回想に照らし合わせれば、方鴻漸の経歴や生活に作者錢鍾書自身のありようが投影されていることは間違いない。『困城』中に描かれる方遯翁・方鴻漸父子の古文を用いた書信の往来も、楊絳の「その年、鍾書は清華大学に合格し、秋には北京に出て入学した。彼の父親が取蔵していた“先兄家書”はこの頃から始まった」⁸という記述に基づけば、実際の錢父子の書信往来を反映したものであろう。

尤も『困城』の主人公方鴻漸と作者錢鍾書を比較しても、共通点と言えるのはせいぜい出身地と、北京の大学を卒業後、西欧に留学したという経歴のみで

あり、又方鴻漸の父親方遯翁も、楊絳が方遯翁と錢鍾書の父親はあまり似ていない⁹と述べているように、主人公父子のモデルを作者父子と断じるのは早計であり、恐らく錢鍾書としては小説創作における人物造形時にそれぞれ参考にした点があるという程度であろう。ただ、『困城』において方鴻漸の父親方遯翁は「清朝の挙人であり、郷里の江南の一小県では名士であった」と紹介されており、それに鑑みれば、方遯翁は錢鍾書の親戚中の科挙及第者であった何人かが融合されてモデルとなった可能性は指摘できる。¹⁰

一方、錢基博が息子に厳格なだけではなく、自身にも厳しく又勤勉な性格であったことは、次の記録に顕著に示されている。

錢基博は平素から非常に厳肅な人で、態度が謹厳であった。娯楽場にも足を踏み入れず、私達子弟は皆彼に対し、かなり畏敬の念を抱いていた。伯父は普段は単身で外地で仕事をしており、教育や執筆に忙しく、生活が清貧であり、世話をする家人もいなかったの、長く血便病や頭痛症を患う結果となってしまった。それでも伯父は読書や執筆に専念し、執筆をしながら、痛みを止めようと頭を叩いていたものだ。¹¹

これは錢鍾書と兄弟のように育った従弟の一人である錢鍾魯の回想であるが、家族からも畏れられる、頭痛をこらえてまで執筆に打ち込む、禁欲的で学究的な学者像である。

『困城』における父親方遯翁を見てみよう。

鴻漸はわかっていた。父親のこうした話は自分に向けられてはいるものの、日記や回想録に記載して、天下後世に方遯翁が息子を教育する際にいかに正しい道を以て行なったかを見せつけるのが主たる目的である、と。(略)彼(方遯翁)は今何か言ったり、何かしても、同時にすぐ日記や言行録にどのように書こうか考える。

この描写の筆致には皮肉が籠もっている。方遯翁の言動の目的は、日記や回想録に記述することで、自分が優れていると後世に知らしめるためであるとしているのである。又上記の引用に引き続いて、方遯翁が実際には自身が不満に

感じていることを、息子の不満であるかのように書き記す様が描かれる。こうした方遯翁の自己記録魔的な様は、前時代清朝の挙人という旧式知識人の知的生活のあり方を反映し、尚且つそれが諷刺の対象とされていると言える。よしんば方遯翁のモデルが錢基博でなかったとしても、錢基博が執筆に打ち込んでいた様は方遯翁の描写に当然幾らかは反映されているだろう。

更に錢鍾書の短篇小説「猫」には、主人公李建侯・愛黙夫妻の父親がともに清朝の遺臣であったという記述がある。

李氏夫妻の父親はどちらも清朝の遺老である。李夫人の父親は名望があったし、李氏の父親には金があった。(略)彼の書く文章は平凡だし、字も特に優れている訳ではない。しかし、彼は幾つか自分の官職印の「某年進士」とか「某省布政使」などを押しさえすれば、自分の字と文章が、他人がすぐ大枚をはたいて欲しがるとなると気付いた。彼は清朝の滅亡には代価があり、遺臣は一仕事をするにふさわしいのだとやっとなり、そこで心が落ち着いたので、進んで娘を西洋式の学校に入れ勉強させたのだ。¹²

この「猫」に見られる李夫人の父親の人物描写は、先に見た『圍城』の父親の人物描写に相通じる点がある。それは錢鍾書が主人公の父親世代の知識人を相当戯画化しているという点である。既に滅びた清朝の官職印を用いて金儲けをする李夫人の父親の姿からは、殊に諷刺的な色合いを感じ取れよう。錢鍾書は無論、作品の中で様々な人物を描いており、その殆どが戯画化されているのだが、科挙受験経験者である旧式知識人は、前述の引用に顕著に示されるように、特に相対化されて滑稽な色彩を帯びて描かれる。

これら小説中の旧式知識人は、家族という小社会において支配的な力を振るう人物として典型的に描かれることが多いが、錢鍾書の作品も例外ではない。例えば本稿冒頭に挙げた『圍城』の引用は、方遯翁の「お前の結婚のことも本腰を入れねばな。二人の弟はとっくに嫁を貰って、子供もいる。仲人をしようというのも何件かあるし」というセリフに続くものである。子の結婚は親が取り仕切る「包辦婚」が通例であった 1930 年代中国を反映しているセリフであ

る。こうした旧式知識人の結婚観は、銭基博にも容易に見出せる。銭鍾書と楊絳の結婚は恋愛を経た自由結婚であるが、銭基博は息子に許した自由結婚を娘には許さなかった。銭基博は娘鍾霞を自身の教え子である石声淮と結婚させようとし、その結婚を望まなかった鍾霞を心配した母親が、銭鍾書に手紙を書かせ、その縁談を思い止まるように説得。しかし、息子のこの容喙は父親を激怒させたのみで、鍾霞は1942年に石と結婚している¹³。この結婚は結果としては不幸なものではなかったようだ¹⁴が、家父長が絶対的な権力を振るった一例として挙げられるだろう。但し、こうしたエピソードから銭基博が単なる暴君であったと断じる訳にはいくまい。こうした父親の所業は恐らく当時としては珍しくなく、又、銭基博が娘の結婚相手に選んだのが、自身の可愛がっていた優秀な学生であったという点には、父親としての娘への愛情が見て取れるからである。

事実、銭基博は銭鍾書を長子とする自身の子供達を決して可愛がっていなかった訳ではない。先に見た『国学概論』序文代筆の一件も、息子の能力の高さを認めていた故のことであろうし、銭基博は息子からの手紙を全てノートに貼り付け、大切に保存していたともいう¹⁵。自著『古籍举要』（上海世界書局1931年）の序文においては、ある二冊の書物に関し銭鍾書と議論になった件を紹介している。それらの書物に対する父と子の評価は異なり、銭基博は年長者として諭すように解説するが、銭鍾書は負けずに反駁し、自説を滔々と述べ譲らない。そんな息子に対し、銭基博は憤るどころか次のように記す。「隠棲し講義をし、互いに質問し合える子弟がいるというのは、これ又私の生活の一つの楽しみである」¹⁶。ここには、自らと対等に議論するまでになった息子の学問的な成長を喜ぶ父親の姿がある。自身にも家族にも厳しく、畏れられてもいた銭基博であったが、当時における父親として、又学者として、頑固ながらも誠実なありようであったのかもしれない。

3. 銭鍾書の「林紘の翻訳」

銭鍾書に「林紘の翻訳」という一篇がある。1963年3月執筆、同年6月『文

学研究集刊』掲載、後に『旧文四篇』（1979年）、『七綴集』（1985年）に収録された。銭鍾書は文中、林紘訳の作品が文学史上果した役割について触れ、次のように述べる。

私自身もまさに林訳を読んで外国語学習への興味をかきたてられた。（略）林訳に触れて初めて私は、西洋の小説がそんなにも魅力的であると知ったのだ。（略）もし当時私に英語を学習する何か自覚的な動機があったとするなら、そのうちの一つは、間違いなくハガードらの冒険小説を実に痛快な思いをしながら読むことができた日があったから、ということだ。¹⁷

更に、林紘の友人であった陳衍との対話においても「林紘の翻訳小説を読んだために、外国文学に関心を持ったのだ」と強調し、次のように林紘の魅力を述べた。

最近、偶々林訳小説のページを繰ってみたところ、意外なことに、なかなかどうしてまだまだ魅力があるではないか。私はその本を読み終えただけでなく、立て続けに林訳作品を再読し、多くが再読に値することに気付いた。たとえ至る所遺漏や誤訳ばかりであったとしてもだ。¹⁸

林紘の翻訳作品は多くの中国現代作家に影響を与えたが、銭鍾書も確実にその一人であった。銭鍾書は西洋言語に堪能であり、それゆえ「林紘の翻訳」の中で、林紘の誤訳を厳しく指摘してもいるが、自らの外国語学習の原動力となったのが林訳作品の数々であったと述べ、林訳は文学作品として魅力あるものだと言明している。小学校時代までは突出して英語が出来た訳ではない銭鍾書が、清華大学入学時には中文英文双方における文才を全校に知らしめるまでになったのを訝しく思った同級生の回想があるが¹⁹、銭鍾書の文才を支えていたのは中文面においては父親の厳しい古文教育であり、英文面におけるきっかけは林紘訳の作品群だったのである。

さて、この銭鍾書の「林紘の翻訳」の背景には、父銭基博と林紘との確執が

存在している。銭基博は 1914 年から翌年にかけて『小説月報』に武俠ものの短篇小説を 29 編発表した。『技撃余聞補』と題されたこの一連の小説は、1916 年に『武俠叢談』として商務印書館から単行本が刊行されているが、林紓が 1913 年²⁰に商務印書館から出版した武俠小説『技撃余聞』に銭基博が啓発されて執筆したものであった。一連のシリーズの一篇目の作品には前書きが付されている。

この春、家に閉じ籠もっていたので大層暇にしていたところへ、友人が林紓の『技撃余聞』をくれた。叙事は簡素で力強く、晋・陳寿の『三国志』のようだった。私は林紓の文章を非常に良いと感じた。ここで私の知っていることを書き記し、林紓の遺漏を補おう。私自身は、良く書けたものは林紓にも劣らず、抜きん出ていると思っている。甲寅陰曆二月記す。²¹

この銭基博の自負はなかなかのものと言って良いだろう。銭基博はこの時 28 歳。「良く書けたものは林紓にも劣らない」という一文は、当時既に多くの外国文学作品を翻訳して名を上げていた林紓に対する一種の挑戦とも取れる書き方である。事実、『技撃余聞補』は読者の反応もかなり良かったようである。しかし、林紓の憤激を買いもした。当時『小説月報』の主編を務めていた惲鉄樵についての、友人鄭逸梅の回想には以下のようにある。

惲鉄樵は、無錫の銭基博に対してひどく濟まないと思っていることがあった。元々彼が『月報』を編集していた時、林琴南（林紓を指す：杉村注）の小説と筆記を掲載し、同時に又銭基博の『技撃余聞補』も入手し、『月報』に連載していた。ある読者が銭氏の文章は力強く激烈で、古びた趣があり、林琴南よりも良いと大変誉めた。因らずもその件が林氏に知られてしまい、ひどく立腹され、すぐに商務の編輯部に書信を寄越された。曰く「今後は才能ある方に道を譲り、自分はもう原稿を出さないことにする」。²²

『小説月報』編集部は、人気作家であった林紓を手放したくなかったために、林紓を慰留。それは同時に銭基博を誌面から放逐することでもあった。実際、

『小説月報』の目録によると、第六卷第五号（1915年5月）以降、銭基博の文章は掲載されていない。この憚鉄樵は1914年10月29日、銭基博への書信において次のように書いた。

近頃林紆が『哀吹録』四編を訳出して、我が社に売ってきた。私は彼の名が社会的に著名であるので、『小説月報』に載せた。とりわけいい加減な間違いが多かった。（略）私は身のほど知らずだから、勝手に書き換えてやった。だから私は林紆の文を最低だと思っている！²³

先に見た鄭逸梅の回想と併せれば、この憚鉄樵の書信は林紆からの妨害を受けていた銭基博を慰めたものと言える。最後の一文の「私は林紆の文を最低だと思っている！（以我侯官文字、此爲劣矣！）」は、銭基博の『技撃余聞補』の前書きの一文「私は林紆の文章を非常に良いと感じた（以予觀侯官文字。此爲佳矣。）」を踏まえたものである。わざわざ銭基博自身の文章をもじってまで林紆を誹謗している所からは、鄭逸梅の言うように雑誌の主編として銭基博を庇いきれず、林紆の権勢に屈する他なかった歯痒さや悔しさをも読み取れるだろう。

更に事はこれでは済まなかった。銭基博の友人李審言宛ての書信には次のようにある。

林紆は15年前、私が出した短篇集を見て憤懣やるかたなく、思いがけないことに私に大いに排斥を加えた。林紆は商務印書館に私の原稿を載せないように頼んだ。（略）友人が私に北京師範大学国学講座を任せようと仲介してくれたのだが、当時林紆は北京文壇において、権勢飛ぶ鳥も落とす勢いであった。彼は私に関する誹謗中傷を行ない、話を潰してしまったのだ。²⁴

銭基博と林紆の歳の差は35歳。当時権勢を誇っていた林紆の、はるか年下の銭基博に対するこのような仕打ちは、真実だとすれば、自信のある者のする事とは思えず、大人気ないと言わざるを得ない。しかし、銭基博は友人への書

信においては林紆からの仕打ちに対する不満を述べてはいるものの、自著『現代中国文学史』においては、林紆訳の『巴黎茶花女遺事』を「この書が世に出ると、人々は今まで見たこともない物語に驚き、訳書は大流行して一世を風靡した。」「思うに中国に文章というものが存在し始めて以来、これまで長篇の愛情小説を書いた者はいない。つまり林紆の『椿姫』が初めてなのである。」と紹介。更に「林紆の文は叙事にも叙情にも巧みであり、見聞し慣れぬものを多く含み、たおやかで読み手を感動させる。」と評し、林紆の文学史上の地位については「ある一時代を風靡し、中国文学においてある道を開拓した。」と結論付けた。²⁵

周知の通り、中国近現代文学史において林紆への評価は、多くの外国文学作品の紹介とそれによる社会的文化的影響、延いては中国現代文学に様々な可能性を拓いた功績といったプラスのものがあると同時に、マイナス面の指摘もある。それは林紆が文学革命に反対したばかりか、あまつさえ新文化運動を攻撃する文章をも発表したことに拠るだろう。林紆の新文化運動攻撃に関しては、魯迅が「私の態度、度量、および年齢」（1928年）において非難し、又当時の文学運動の旗手達によって散々叩かれる所となっている。銭基博の『現代中国文学史』の刊行は1932年12月であるが、林紆批判の素地が既に出来上がっていたことと、銭基博が林紆から受けた仕打ちに併せ鑑みると、銭基博のこの林紆評は極めて客観的且つ冷静なものである。

銭基博は若い時分、『技撃余聞補』で「良く書けたものは林紆にも劣ら」ないと述べ、当時の人気作家林紆を越えんと試みたが、結局林紆の権勢の下に一旦は敗北を喫した。35歳差の林銭の確執は世代間の問題とも捉えられ、父子の確執に擬することが可能である。しかし銭基博は『現代中国文学史』に至り、若い時の林紆との確執を超え、客観的に林紆を捉えられる境地に達している。これは、ある意味では明らかに文壇の擬似家父長であった林紆を超越したと言って良いだろう。

銭基博の『現代中国文学史』が刊行された1932年、北平人文書局から『中国新文学的源流』が刊行された。この書は、当時47歳にして既に文壇における新文学の大家であった周作人の著書として小さからぬ注目を集めた。これに

厳しい批評をしたのが、清華大学在学中の 22 歳の錢鍾書であった。錢鍾書は『新月』第四卷第四期に書評を發表し、周作人が文学を「載道」と「言志」の二種に分けたことに対し、機械的な分類であると批判。更に周作人の誤解や錯誤を詳細に指摘する。周作人は錢鍾書の書評には反応を見せていないが、この書評は当時の知識人に強い印象を残したようである²⁶。錢鍾書と周作人の一件は上記の錢基博・林紓の一件を想起させる。簡単に言えば、父と子がそれぞれ当時の大家に文学上の戦いを挑んだ筈と見なせよう。

ここで錢鍾書の「林紓の翻訳」に立ち返ろう。文中に明示される錢鍾書の林紓小説への愛着は、彼の父親と林紓との確執を考えると些か皮肉な色彩を帯びるが、錢基博の『現代中国文学史』での林紓評を錢鍾書が知らないはずはない。そうしたエピソードを受けて尚、林紓を相対化し得る錢鍾書の姿勢は、父の学術面での謹厳冷静な姿勢を正しく継承したと言える。同時に又その背景からは期せずして、自らの文学観に立脚し、大家の見解と相容れずとも自身の姿勢を貫こうとした錢父子の文学的足跡を看取することもできるのである。

4. 錢鍾書の湖南行きと父への愛憎

錢鍾書は雲南省昆明の西南聯合大学外文系の教授をしていた 1939 年夏、帰省中に当時湖南省藍田の国立師範学院国文系主任をしていた父錢基博から、藍田に来て師範学院の英文系の主任になるように言われている。

夏休みも半分過ぎたある日、鍾書が帰宅し、心配そうな顔で言った。父が湖南から手紙を寄越し、こう言っている。自分は年寄りで病気がちで、息子のことを恋しがっている。藍田に来て自分の世話をしてほしい。同時に新しくできた国立師範学院の英文系の主任を任せよう。一年後には父子揃って上海に戻るということにしたい、と。²⁷

これに関して楊絳は、「自分の世話」云々は口実に過ぎず、要は国立師範学院のために規格に合った教師の人寄せをしているのであると看破していた。錢鍾書の西南聯合大学への教授としての就職は元々破格の待遇であり、同僚教員

や学生の資質の面において、当時の西南聯大と師範学院との差は顕著であった。西南聯大に就職して、まだやっと一年に過ぎなかった錢鍾書は、固より藍田に行きたいはずもなかったが、結局西南聯大を辞職し藍田に向かうことになる。この背景には、錢家一同からの無言の圧力が存在した。

鍾書の母親や弟妹たち、叔父までもがこれは実に素晴らしいことだと考えていた。鍾書が父親に付き添って仕えてくれれば皆安心というわけだし、父親の手配で鍾書は系主任という役得のある仕事にも就けるのだから。これこそ「申し分なし」というやつではないか。²⁸

又、楊絳はこうも書く。

家族中の一致した沈黙をその身に感じていた。その沈黙は、口に出して言えないほど苦しく感じられ、窒息させられそうだった。そのような圧力の下で、鍾書が父の命令に逆らって藍田に行かないなどということになったら、恐らくもう錢家の人間とは見なされないだろう。²⁹

家族の期待に背くことが出来ず、又「子供の頃から大人になった今まで、父親の言うことを聞かないなどという勇氣は持ち合わせていなかった」³⁰ 錢鍾書のこうした姿からは、無論父親の期待に応えたい、家族を失望させたくないという息子の健気な選択をも見て取れようが、一方で親の言うことは絶対であった中国旧来の家族観も滲み出てはいまいか。

他方『困城』において主人公方鴻漸は、湖南省平成の国立三閩大学から教授として招聘される。彼は失恋したてで上海にいつらかったこともあり、その招聘を受け、何人かの仲間と湖南へ向う。楊絳は『困城』に書かれた主人公達の湖南行きが、錢鍾書自身の湖南行きに基づいていることを明らかにしている³¹。『困城』において、この湖南行きの一段は主人公達にとっては悲惨な旅であり、読者にとっては笑いを誘う珍道中記であるが、これらは小説としての虚構化のプロセスにおいて脚色はされているものの、錢鍾書自身が経たつらい旅でもあ

った。錢鍾書の『談芸録』の一段を見てみよう。

戦争が始まってから、私は浙江、江西、湖南、広西チワン族自治区、雲南、貴州の間を往復した。清の鄭珍の経た境遇は、今も改まっていない。体は疲れ果て蚤に散々食われ、空腹の余りたくさんのかゆみを避けることもできない。いつでも蚤に食われるという状況は、本当に南齊の卞彬が賦に読んだ通りだが、蘇軾の言っている「もし食物の中に蠅が入っていたら、口中のものを吐き出して、もう食べるのをやめる」という言葉を思い出すと、深く恥じてしまう（私達はそれどころではなかったのだから）。³²

『困城』湖南行きには、同行者の不快な人となりや荷物の多さ、蒸し暑さと雨のもたらす疲労感、長距離バスの混雑や激しい振動、騒音、体調不良、不潔な宿泊施設、金欠などが描かれるが、その中でも蚤や虱、蠅の多さについては描写がとりわけ詳細である。『談芸録』の一段を受けても、錢鍾書が湖南行きで虫に閉口させられたことは容易に想像がつく。ほぼ一ヶ月に亘った湖南行きには、幾多の困難が潜んでいたのである。

旅の困難は錢基博のせいではないが、錢鍾書にしてみれば父親が湖南に呼びさえしなければ、西南聯大を辞職せずに済み、長旅の道中でつらい思いをせずに済んだであろう。更に加えて、錢鍾書の西南聯大辞職に伴う愉快とは言えない経緯が錢鍾書の気をより滅入らせていた。と言うのは、錢鍾書の辞職は順調には行かず、12月になってから漸く錢鍾書が当時の西南聯大学長であった梅貽琦に書状を送り、正式な手続きを経ずに辞職した旨を謝罪するなど、錢鍾書・西南聯大側双方の思い込みとすれ違いに基づく誤解が多々生じていたのである³³。錢鍾書にとって湖南行きは、妻子から遠く離れ、良い職場を失い、元同僚からは誤解された挙句、旅の道程では辛苦を味わうという泣き面に蜂の結果となっている。そうした経緯を踏まえると、『困城』に描かれた笑劇的な湖南道中記は錢鍾書の父へのささやかな意趣返しとも受け取れるし、父親に逆らえず家族の期待に背けなかった自分の不甲斐なさを笑いに紛らしたものと読めるのである。

その一方、錢鍾書は同じ頃に「寧都再夢圓女（寧都にて再び圓女を夢む）」

という五言詩も残している。「汝豈解吾覓，夢中能再過。猶禁出庭戶，誰導越山河。汝祖盼吾切，如吾念汝多。方疑背母至，驚醒失相詞。」³⁴（娘よ、パパが会いたがっているって君にわかるはずもないのに、夢の中に又君が出て来てくれた。庭から外に出ちゃダメだって言ってあったのに、誰が君を連れて山川を越えてここまで来たんだろう。君のお祖父ちゃんはパパにとっても会いたがっているけど、それはパパが君に凄く会いたがっているのと同じなんだ。ひょっとしてママに内緒で来ちゃったのかい。驚いたら目が覚めて、君を叱ることも出来なくなった。）

詩題に示されるように、異郷で娘を想う内容である。錢鍾書の娘錢瑗は1937年生れ、錢鍾書の湖南行きの際にはまだ2歳である。この詩には、可愛い盛りの娘から離れ、遠く旅の空の下にある父親としてのつらい心情が溢れている。しかしながら、同時に注目すべきは「汝祖盼吾切」の一句であろう。「父が自分に会いたいという思う気持ちは、自分が娘を想う気持ちと同様である」と詠む錢鍾書は、自身が父親となったことで、子を慈しみ愛しむ気持ちを知った上で、父親をも思いやれるようになったのである。このように、錢鍾書の小説や詩などの作品からは、父錢基博に対する抵抗したい思いと逆らえない弱さだけでなく、更に加えて父への気遣いや愛情も見出せる。こうした錢鍾書の心の動きは、人が家族に対して抱く思いが、愛情のみならず、常に反抗心や時には憎悪をも含み得る複雑なものであるという普遍的な真理を鮮明に示しているだろう。

錢鍾書のこの湖南滞在および国立師範学院での在職は、1941年夏までのほぼ一年半で終わりを告げる。1940年には妹錢鍾霞が湖南藍田に来て老父の世話を始めたため、彼が父親の傍にいななければならない理由がなくなったからである。上海に戻った錢鍾書は西南聯大への復職の準備を始め、聯大からの正式な招聘状も手にしたが、12月、日本の真珠湾攻撃に端を発する太平洋戦争の勃発により上海が陥落。錢鍾書はそのまま上海に留まらざるを得ず、昆明に戻る術を失う。西南聯大への復職も叶わなくなり、錢鍾書は舅楊蔭杭の紹介で震旦女子文理学院で『詩経』の講義を行ったり、以前勤めていた光華大学でも教鞭を執る傍ら、藍田にいた頃に着手した『談芸録』の執筆を続けるなどして過

ごすことになる。「孤島」と化した上海での生活は、言わば故国喪失の悲哀と痛苦がともにあったと言えるが、錢鍾書は其中で長編小説『困城』の構想を育んでいったのであった。

5. 結びに代えて——錢鍾書の字「黙存」とその後

錢鍾書の『困城』について、妻楊絳はその主たるテーマをタイトル「困城」の示唆する含意として「城に囲まれている人は逃げ出したい。城の外の人には中に飛び込んで行きたい。結婚にしても、職業にしても、人生の願望は大抵このようなもの」³⁵と語った。元来「困城」はモンテニュー『エッセー』中の一段からイメージを触発されたものであるが、この「囲まれた城」の意境は確かに物語を通じて人生全般に関わる哲理となっている。しかし、「囲まれた城」のイメージは筆者がかつて論証したように³⁶、近代中国がぶつかった「壁」のイメージをも喚起する。『困城』は人間の普遍的な境涯のみならず、中国の近代のあり方、つまりは中国の近代化の薄皮の内側には旧来の儒教的倫理や封建道徳的価値観が根強く蔓延っている様を描き出しているのであった。そして、この「囲まれた城」のイメージは同時に錢鍾書自身の境涯をも照らし出す。錢鍾書にとって、旧来の儒教的倫理や封建道徳的価値観とは、即ち父親錢基博がその具現であっただろう。既に見てきたように、錢鍾書は父親という壁を超えんと様々にもがき、常に西欧留学経験に基づく近代的価値観という理性と、理性では割り切れない愛情や反発心の狭間にあった。錢鍾書は錢基博を、自身を囲い込む壁に感じていたのではないだろうか。

錢鍾書は『困城』の発表後、長編小説『百合の心』を執筆している。しかし、この作品の原稿は、1949年夏、錢鍾書の清華大学外文系教授就任に伴う上海から北京への引っ越しの際に紛失してしまう。錢鍾書は『困城』1980年版の前書きに次のように書いている。

（『百合の心』の原稿の紛失以降）興趣がすっかり失せ、それきりずっと二度と奮起することがなく、以来却って気楽になってしまった。年を一年一年重ねていくごとに、

それに従って創作意欲も衰え、創作能力も次第に消失してしまった（略）。二度と小説を書くつもりはなかった。

実際、錢鍾書は建国後、古典研究の論考である『管錘編』全四巻や評論等を著しはしたが、小説の執筆はしていない。錢鍾書の生涯を振り返ると、小説創作は1940年代に限られている。清華大学から1952年に中国社会科学院文学研究所に異動となり、研究プロジェクト等に参与せざるを得なかったという事情もあるだろうが、錢鍾書は1998年に亡くなるまで文人・学者としての道を歩み続けた。文学創作と研究活動は「書く」という面においては共通しているものの、やはり本質的に異なる点がある。それは文学創作が自己表現や自己陶醉に他者をも巻き込む力を持った芸術活動の一環であるのに対し、研究が創造性を重視しながらも検証されることを前提とした冷厳な学術活動であることに拠るだろう。錢鍾書は後半生、この研究活動のみに従事したのである。

錢鍾書は元々、字を「哲良」といった。可愛がってくれた伯父錢基成がつけてくれたものである。しかし錢基成の没後、父錢基博が息子のお喋りばかり言う癖を戒めるつもりで「黙存」という字に改めた。『易経』繫辭上傳の「黙してこれを成し言わずして信あるは、徳行に存す」から取ったものである。錢鍾書は「実は僕は“哲良”という字を気に入っていたんだ。賢明でもあり、立派でもあるということだから」と楊絳に語っている³⁷が、この「黙存」という字は彼自身がつけた号「槐聚」や筆名として用いていた「中書君」と比すれば、錢鍾書の後半生を考える上でより象徴的である。中国は建国後、反右派闘争や文化大革命といった政治的極限状況を迎える。文芸の有り方も一定の路線に規制されていったことは周知の通りである。錢鍾書がそうした時代の流れの中で文学創作から完全に身を引いたということは、一種の保身であるとの指摘も考えられ得るが、一方で字に籠められた父の教えを頑なに守ったとも言えるのではないだろうか。錢鍾書は1980年の訪日の際、京都大学で懇談会に出席している。その席上、70歳を迎えんとしていた錢鍾書は次のように父錢基博を語っている。

私と父とは大変仲が良かったのですが、仲が良いというのは、感情の上でのことでして、物の見方となりますと、父は別段私に賛成しませんでした。

私も父のものに対しては、あの文学史などは中々面白味があり、中々掌故に富んでますが、文学批評としてはちょっと落ちるように思います。³⁸

こうした評は、かつて銭基博が林紵を冷静に分析し評価したように、銭鍾書が銭基博を完全に相対化・対象化し、一步引いた地点で父親を見ることの出来る境地に達したことを意味しているだろう。

又銭鍾書は、銭基博の最後の赴任先であった華中師範学院（現在の華中師範大学）が1987年に銭基博生誕百年記念の催しを企画し、銭基博の国立師範学院時代の学生であり華中師範大学教授でもあった彭祖年を通じて内々に打診した際には、次のような書信を送った。

記念会の件について、ご厚情は大変ありがたく、息子としては心に刻み骨身にしみとおるほどでございますが、わたくしめが思いますに、そんな記念会を開いて費用の無駄遣いをしない方がよろしいのではないのでしょうか。近頃、記念会ばやりのこの風潮は、招待状を出したり、人に文章を書いてもらったりですが、わたくしめはまあ相手しておりません。³⁹

この書信の筆致にはからかうような意地の悪さが滲み出ている。更に銭鍾書は華中師範大学からの正式な要請も断ったため、結果として催しは取りやめとなり、華中師範大学は銭基博生誕百年記念特集号の学報を出すという形でまとめている。実は銭鍾書が生誕記念の類を嫌う姿勢は、この一件の40年以上前に書かれた『困城』にも既に表れている。

文人は死者が出るのが大好きである。哀悼の文章を書けるテーマができるからだ。(略)
文人は一年、何年、何十年、或いは何百年も前の古い死者でボロ儲けできる。「逝去一周年記念」だの「三百年祭」だの、どれも一様に良いテーマだ。

こうした錢鍾書の一貫した姿勢は、父錢基博が「集会にも行かず、宴会にも出席せず、著名な人が訪ねて来ても答礼せず」⁴⁰と語った自身のありようと通底する所がある。錢基博が自身をより美化して描いた可能性は否定出来ないが、少なくとも清廉な自分でありたいと思って書いたであろう姿勢を、息子錢鍾書が継承したのである。

オックスフォード大学とパリ大学に留学した錢鍾書の小説については、当然のことながら英文学・仏文学の影響の指摘がある。しかし、錢鍾書においては前述の通り中国の伝統的な封建的家父長制の影響も色濃い。錢鍾書は『困城』の中で、父親世代の旧式知識人を新式の知識人と対照させ、諷刺的な笑いの矢を放つことで「父」たる存在を徹底的に相対化した。その観点からすれば、『困城』は錢鍾書の父を超えんとする試みの帰結だったとも言える。そして、錢鍾書は父を超えた先において、父の名付けた自身の字「黙存」の通りに処すことを選択した。中国全体が大きな歴史の波にもまれて行く中で、若い頃と比べて「話さず、客に会わず、小説も書かず、(中略)恨み言一つ言わずに生真面目一本」⁴¹と言われてしまうほどになる。父錢基博の姿にも重なる処しようである。若い頃に自分の意志で学んだのは西欧文学であるにも関わらず、錢鍾書の後半生の論著の代表である『管錐編』が古典の書物に関する中国の伝統的な札記の形式を採り、且つ文言文で書かれ、しかも繁体字で印刷されているという事実も十分に示唆的ではないだろうか。

魯迅は「我々は現在いかにして父親となるか」(1919年)において「中国の覚醒した人は、年輩者には従い、年少者を解放しようとするため、一方で古い帳面を清算しながら、もう一方では新しい路を切り開かねばならない。(略)これは極めて偉大で重要な事業であり、又極めて困難に満ちた事業なのである。」⁴²と慨嘆した。錢鍾書の道程もこの「一方で古い帳面を清算しながら、もう一方では新しい路を切り開いた「困難に満ちた」ものではなかったか。西欧の現代的価値観の受容と家族という精神的な拠り所は、常に現代作家達の心の内で葛藤し、相剋していたに違いない。錢鍾書が中国文学史上に築いた地位は独自のものであり、父錢基博の業績を超えているが、若き錢鍾書の道程を辿ると、彼の作品にも彼自身の経歴にも常に錢基博の影を見出し得、その影は

同時に彼の心の内の現代的価値観と精神的な拠り所の相剋でもあった。そして、又それこそが『圍城』という錢鍾書の文学的結実へとつながったのである。

1 錢鍾書著『圍城』人民文学出版社 1980 年。尚、文中の『圍城』の引用は全て本書に基づき、拙訳に拠る。

2 『圍城』と「猫」では主人公の父親が父権的支配力を振るう存在として描かれる。「上帝の夢」は人間を作り出す「親」たる神が主人公。「靈感」は作家を主人公とし、作品を生み出す「親」として「子」たる登場人物達から糾弾される一種のファンタジー。「紀念」は夫の従弟と不倫関係になり、子供を宿してしまう女性が描かれる。

3 錢鍾書の母親王氏に関しては、錢鍾書のみならず、父親錢基博も全く言及していない。楊絳の伝記『聽楊絳談往時』（吳学昭著、生活・讀書・新知三聯書店 2008 年）には、姑について「生来質朴真面目で、無口かつ口下手であった」とある。

4 楊絳「記錢鍾書与『圍城』」（『楊絳文集』第二卷、人民文学出版社 2004 年）

5 錢鍾韓「我所了解的唐文治先生」（『江蘇文史資料選輯』第 19 輯、江蘇古籍出版社 1987 年）

6 楊絳注(4)前掲書

7 楊絳注(4)前掲書

8 楊絳注(4)前掲書。文中に見られる「先兄」とは錢鍾書の幼名。

9 楊絳注(4)前掲書に「読者は、方遯翁は方鴻漸の父親なのだから、当然錢鍾書の父親がモデルであると思われるだろうが、方遯翁と錢鍾書の父親は少ししか似ていない。（略）親戚友人の間でこうした旧式の家長はいくらでも目に来た」とある。

10 錢鍾書一族には科挙及第者が多数いる。祖父錢福炯、伯父錢基成は生員、祖父の長兄錢福煒、次兄錢熙元は挙人。又、母方の一族も無錫出身であり、祖父王績は生員、祖父の兄王緯は進士、伯父王蘊章は挙人である。これらは、孔慶茂著『丹桂堂前・錢鍾書家族文化史』（長江文芸出版社 2000 年）と劉桂秋

著『無錫時期的錢基博與錢鍾書』（上海社会科学院出版社 2004 年）を参照した。

11 錢鍾魯「無錫繩堂滄桑史」（劉桂秋注(10)前掲書）

12 錢鍾書「猫」（錢鍾書著『人・獸・鬼』開明書店民国 35 年）

13 錢鍾書の妹鍾霞の結婚に関しては楊絳『我們仨』（生活・讀書・新知三聯書店 2003 年）を参照した。

14 石声淮は後に華中師範大学教授となり、1980 年代には妻錢鍾霞とともに錢基博の遺稿の校訂などを行なっている。

15 楊絳注(4)前掲書には錢基博の死後、彼が錢鍾書からの手紙を全て貼り、大切にしていたらしいノートが発見された旨の記述がある。

16 錢基博「『古籍掇要』序」（曹毓英選編『錢基博學術論著選』華中師範大学出版社 1997 年）

17 錢鍾書「林紘的翻訳」（『錢鍾書集・七綴集』生活・讀書・新知三聯書店 2001 年）

18 錢鍾書注(17)前掲書

19 鄒文海「憶錢鍾書」（『伝記文学』第一卷第五期 1962 年 7 月）鄒文海は錢鍾書の東林小学校及び清華大学の同窓生。東林小学校では英語教育を取り入れていた。

20 薛綏之、張俊才編『林紘研究資料』（福建人民出版社 1982 年）に、『技擊余聞』は宣統初年（1909 年）には既に鉛印本が刊行されていたらしい旨が紹介されているが、初版の現存は未確認のため、ここでは版本が確認済みの 1913 年を採用することとする。

21 錢基博「技擊餘聞補」（『小説月報』第五卷第一号民国 3 年 4 月）

22 鄭逸梅「憚鉄樵獎掖後進」（『鄭逸梅選集』第二卷、黒龍江人民出版社 1991 年）

23 錢鍾書注(17)前掲書

24 錢基博「再答李鱗叟書」（李詳著、李稚甫編校『李審言文集』江蘇古籍出版社 1989 年）

-
- 25 錢基博著『現代中国文学史』文海出版社 1981 年 5 月
- 26 趙景深著『文壇憶旧』（上海書店 1983 年。初版は北新書局民国 37 年）に、「以前、新月の雑誌の書報評論に中書君（錢鍾書）の書評が載ったことがある。それは、人々を驚愕せしめるものと言って良く、文芸工作者は甚大なる注目を寄せた。」とある。詳しくは拙稿「錢鍾書の『猫』をめぐる——知識人としての自負自尊と自嘲自虐のはざま」（『お茶の水女子大学中国文学会報』第 22 号 2003 年）を参照されたい。
- 27 吳学昭注(3)前掲書
- 28 楊絳「錢鍾書離開西南聯大的实情」（『楊絳文集』第三卷、人民文学出版社 2004 年）
- 29 吳学昭注(3)前掲書
- 30 楊絳注(28)前掲書
- 31 楊絳注(4)前掲書に「私は方鴻漸ら五人の一行が上海から三閩大学へと向う旅の道中の一段を読むのが好きだ。私は鍾書と湖南へ同行しなかったが、同行者五人については私は皆知っている。」とある。
- 32 錢鍾書著『談藝錄』中華書局 1986 年。文中に見られる「鄭珍の経た境遇」とは、鄭珍の詩「自沾益出宣威入東川」を、卞彬の賦は「蚤虱賦」を指し、蘇軾の言は『曲洧旧聞』に見られるエピソードに拠る。
- 33 錢鍾書の西南聯合大学辞職については拙稿「散文『悪魔の夜の錢鍾書先生訪問』試論——作家の自己対話と西南聯合大学における錢鍾書」（『言語文化論叢』第 12 号、金沢大学外国語教育研究センター 2008 年）にて詳論した。
- 34 錢鍾書「寧都再夢圓女」（錢鍾書著『槐聚詩存』生活・讀書・新知三聯書店 1995 年）「圓女」とは錢鍾書の娘錢瑗を指す。
- 35 孫雄飛「錢鍾書、楊絳談『困城』改編」（解璽璋主編『困城内外——從小説到電視劇』世界知識出版社 1991 年）
- 36 拙稿「錢鍾書『困城』解説 1——「近代」中国のさまよえる知識人達」（『言語文化論叢』第 13 号、金沢大学外国語教育研究センター 2009 年）。「困城」の含意とモンテーニュ『エッセー』の関わりについても詳しい。

-
- 37 楊絳注(4)前掲書
- 38 「錢鍾書先生を囲む懇談会」（『颯風』第13号、颯風の会1981年）
- 39 「錢鍾書彭祖年信一九八七年三月二十日」（羅厚輯注「錢鍾書書札書鈔（資料）」、『錢鍾書研究第三輯』文化芸術出版社1992年）
- 40 錢基博「潛廬自傳」（傅宏星編撰『錢基博年譜』華中師範大学出版社2007年）
- 41 施蛰存による錢鍾書評。（李洪岩・范旭侖著『為錢鍾書聲辯』百花文芸出版社2000年）
- 42 魯迅「我們現在怎樣做父親」（『魯迅全集』第一卷、人民文学出版社1981年）

【附記】

本稿は科学研究費補助金の交付を受けた若手研究（B）「1940年代文学に見る“中国近代”の隘路」（課題番号19720077）による研究成果の一部である。